

水野祥子

『イギリス帝国からみる環境史—インド支配と森林保護—』

岩波書店（岩波アカデミック叢書）二〇〇六年三月二十四日刊、

本文二二六頁 文献目録一四頁 定価（本体七八〇〇円＋税）

遠山 茂樹

本書はイギリス帝国を環境史の観点から論じた力作である。周知のように、環境史は歴史学では近年最も注目されている研究領域のひとつであるが、本書は英領インドの森林政策の展開を通して、植民地における環境保護主義の成立過程を跡づけ、かかる植民地の環境保護主義がグローバルな環境保護主義の成立に及ぼした影響を明らかにしている。評者はいわゆる「帝国史」を専門に研究しているものではないが、英国森林史に少なからず関心を抱いているもののひとりとして、贅言を述べてみたい。

本書の構成は、次の通りである。

目次

第一章 帝国からみる環境史

第二章 インド森林局の成立

第三章 森林局ネットワークの展開

第四章 植民地の環境保護主義

第五章 帝国の環境保護主義

第六章 森林保護の国際化

第七章 植民地の環境保護主義のインパクト

注

巻末付録 帝国林学会議の代表リスト（第一回～第四回）

あとがき

文献目録

索引

以下、本書の基本構成にしたがって、内容を簡単に紹介しよう。

第一章「帝国からみる環境史」では、本書のねらいが述べられ、環境史と帝国、イギリス帝国における森林保護の歴史が概観されている。一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、イギリス帝国において、環境問題がどのように認識され、いかなる対策がとられてきたのか。この点の考察を通して、グローバルな環境保護主義の成立過程において帝国が与えたインパクトを明らかにすること。これが本書のねらいである、と著者の意図は明快である。イギリス帝国で林学・森林政策が最初に確立したのはインドであった。従来の研究ではインドの生態系や伝統的な社会システムは、イギリス人によって破壊されたという考え方が支配的であったが、近年、そうしたステレオタイプな見方は修正されつつある。著者はグローバルな環境保護主義が誕生した理由を知るには、制度面だけでなく、森林管理官の環境認識の変化についても分析する必要があるとして、ヨーロッパの環境保護主義の新たな側面を明らかにすべく、次の三つの主要なテーマを

設定する。すなわち、(一) 環境保護に関する思想や制度を確立し、イギリス帝国全体に普及させるのに植民地インドの森林管理官が果たした役割、(二) 植民地の環境保護主義の特質、(三) 植民地の環境保護主義がグローバルな環境保護主義に及ぼしたインパクトである。

第二章「インド森林局の成立」では、インド森林局の成立に至る歴史的背景と森林局の組織編成、さらには森林局設立以後の森林政策の展開が述べられる。周知のようにイギリスは一八世紀の半ば以降インド各地を支配下におさめていくが、その尖兵たる東インド会社にとって、大きな関心事は地稅收入による財源の確保であった。そのために農地化がすすめられたが、それは大規模な森林の伐採を伴った。またイギリス海軍の木材需要の増大やインドにおける鉄道敷設の拡大も森林への圧力となった。インド政庁もこうした状況に鑑み、一九世紀半ばを境に、それまでの森林開発から森林保護へと姿勢を転じていく。一八六四年、インド全土の森林行政を統括するインド森林局が設立され、その活動方針は一八七八年に是正された森林法によって大枠が定められた。これによって、インドの森林は「保留林」、「保護林」、「村落林」の三つに分類されたが、政府所有の「保留林」を含む森林局管轄下の森林面積は拡大の一途をたどり、一九世紀末までにはインド帝国領の約五分の一を占めるまでになったという。その一方で、森林局と地稅増収をもくろむ収稅局、あるいは慣習的な用益權を制限された現地住民との軋轢が生じ、対立も激化していった。

第三章「森林局ネットワークの展開」では、インドを中心とした森林局・森林官のネットワークが帝国規模で形成され、やがてそれが帝国を超えた国際的なネットワークに発展していく過程が明らかにされる。一八八〇年代から二〇世紀初頭にかけて、イギリス帝国内では森林局が次々につくられていったが、インドの森林管理官はその多くのケースに関与し、林学・森林政策を普及させるのに指導的役割を果たしていた。帝国内の植物園は森林局とは根本的に異なる性格を有していたが、森林局の先駆的存在として、重要な位置を占めていた。英領インドにおける林学・森林政策の確立に大きな影響を及ぼしたのは、大陸ヨーロッパ、ことにドイツの林学者であった。かれらの多くはインド森林局を退職

後、イギリスに渡り、森林管理官の育成につとめた。こうして植民地インドと大陸ヨーロッパ、そして本国イギリスとの間に協力体制が整備されていった。しかし、インド森林局のネットワークは帝国あるいはヨーロッパに限定されたものではなかった。それはまた国や帝国という枠を越えて、国際的なネットワークにまで発展していったのである。これとは対照的に、第一次世界大戦以前の本国イギリスでは、森林政策への関心が低く、学問としての林学も確立していなかった。

第四章「植民地の環境保護主義」では、一九世紀後半から第一次世界大戦までに確立した植民地の環境保護主義について述べられる。インド森林管理官たちが示した森林保護の意義のひとつは森林資源の持続的産出であり、またひとつは環境の安定化であった。従来、森林が土地・気候に及ぼす影響は二次的なものと考えられてきたが、近年、「乾燥化理論」が重視されており、インドの森林管理官は資源管理という側面よりも、乾燥化理論にもとづく環境保護主義を提唱した。かれらは収税局や地元民との対抗上、みずからの森林政策を有利に進めるための理論的武器としてこの乾燥化理論を用い、森林保護を唱えたのである。インドの林学・森林政策は大陸ヨーロッパの強い影響を受けてきたが、二〇世紀初頭になると、インドの森林管理官は熱帯の問題に特化した「熱帯林学」の確立や専門的かつ科学的な「科学的林学」の推進につとめた。一九〇六年には「科学的林学」を推進する目的で、帝国森林研究所がインドのデーラ・ドゥーンの林学学校に併設された。この頃にはインド政庁も、自然災害と農業の関連から、乾燥化理論を重視するようになっていた。

第五章「帝国の環境保護主義」では、第一次世界大戦後に本国イギリスにおいて森林政策をめぐる状況が大きく変化した経緯が述べられ、一九世紀後半にインドで確立した「植民地林学」が大戦間期に「帝国林学」として再編される過程が検証される。イギリスでは、一九一九年に制定された森林法に基づいて森林委員会 (Forestry Commission) が設置され、植林による木材生産の拡大が企図された。さらに国内のみならず帝国レベルでも森林保護の必要性が指摘され、一九二〇年にはロンドンで第一回帝国林学会議が開催され、翌一九二一年には帝国林学協会が設立された。こうした帝

国林学会議や帝国林学協会は、第一次世界大戦以前に植民地間で発展していたネットワークを、本国を中心とする帝国林学という形で再編成する役割を果たしたのである。第一次世界大戦後は、帝国内の森林枯渇だけではなく、帝国外の北欧やアメリカからも森林枯渇の報告が続出し、「世界木材飢饉」の危機感も増大していった。一九三〇年代には、世界各地から土壌浸食や洪水、水源の枯渇という問題が同時多発的に報告されるようになり、一九三五年、南アフリカで開催された第四回帝国林学会議では、乾燥化が帝国各地に共有される普遍的な問題として認識された。植民地の森林管理官は帝国林学を構成する重要な一員として国際林学会議に参加し、乾燥化の脅威を訴えていたのである。

第六章「森林保護の国際化」では、森林保護のための国際的なネットワークの形成とグローバルな環境保護主義の成立について述べられる。一九二〇年代末から三〇年代にかけて、世界各地で土壌浸食や洪水、旱魃などの壊滅的な災害が発生し、乾燥化による被害の影響は科学者のあいだに大きな関心を引き起こした。一九三〇年代に入ると、森林が環境全体に及ぼす影響が従来にもまして活発に議論され、乾燥化理論は国際林学会議（国際森林研究組織連盟主催）の場を通じて普遍化してゆく。とはいえ、乾燥化理論の重要性についての認識には、地域によって温度差があった。たとえば、多くのヨーロッパ諸国にとっては、乾燥化はさほど切実な問題とは認識されていなかった。一方、イギリス、フランスの植民地やアメリカからの代表者は、乾燥化の問題を国際的な課題としてとりあげようと努めた。第一次世界大戦後、インド森林管理官にとって乾燥化の問題は、熱帯植民地特有のものというよりも、むしろより普遍的な問題として認識されるようになった。一九三〇年代には世界的規模で乾燥化に対する危機感が高まったが、インドをはじめとする植民地の森林管理官は、ヨーロッパ主導の国際林学会議の場で乾燥化理論の重要性を説き、それを国際林学に反映させていったのである。

第七章「植民地の環境保護主義のインパクト」では、本書の総括がなされ、第一章で掲げられた三つの論点が整理されている。著者は植民地の森林管理官が提示した乾燥化というパラダイムが、今日のグローバルな環境保護主義に与え

た影響は決して少なくないとして、大戦間期に注目する。というのも、森林破壊によって土地や気候が乾燥化し、土壌浸食や洪水が激化するという認識が普遍化され、と同時に地球の一体化と有限性が意識されるようになるのは、まさに大戦間期のことだからである。それは当該時期における「グローバルな危機感」の形成と裏腹の関係にあった。

以上、本書の概要を述べてきたが、『インディアン・フォレスト』を主史料としながら、植民地インドの森林管理官の言説を仔細に分析し、ひろい視座で帝国と環境保護主義の展開を論じた本書は、斬新な帝国史あるいはグローバル・ヒストリーの試みとして高く評価されよう。

本書の全体をふりかえってみると、なによりもインドの森林管理官が、帝国ひいてはグローバルな環境保護主義の成立に際して果たした指導的役割が注目される。イギリス帝国内で最も早い時期から林学・森林保護政策を確立したのは植民地インドであり、帝国各地に森林政策を普及させていったのは、ほかならぬインドの森林管理官であった。本国イギリスは、植民地インドの影響を受けて、第一次世界大戦後ようやく本格的な森林保護政策に着手する。つまり、「林学に関するかぎり、知識の流れは、圧倒的に、インドを中心とする植民地から本国イギリスに向かっていった」（二二頁）であり、その逆ではなかった。換言すれば、本書は、科学技術や知識は本国から植民地へと一方通行的に移植され、流入していくという通説を修正すべく有力な手がかりを提供しているのである。植民地の天然資源が本国イギリスによつて搾取・収奪され、それに伴つて植民地の環境が破壊されたことは紛れもない事実である。しかしながら、その一方で、植民地インドの森林管理官が森林保護に尽力し、植民地が本国の林学に多大な影響を及ぼしたことも事実なのである。その意味で、本書は帝国史をいわば逆ヴェクトルでとらえる必要性をわれわれに教示しているといえよう。

また、大戦間期に開催されたヨーロッパ主導の国際会議において、重要な役割を演じていたのがインドをはじめとする植民地の森林管理官たちであったという事実も見のがせない。主導権を握っていたのはヨーロッパでも、主役を演じ

ていたのは植民地の森林管理官であつたというわけである。

さらに本書を通読して評者が強く感じたのは、「ネットワーク」の重要性である。植物園のネットワークしかり、森林局のネットワークしかり、である。それらのネットワークは同時に人的なネットワークでもあり、帝国とはそうしたネットワークを介してさまざまな関係性が生まれる場でもあつたことを、本書はあらためて認識させてくれる。換言すれば、本書は人やモノ、あるいは情報の流れに着目し、歴史事象を関係性のなかで描出しているのである。林学発展のヴェクトルは植民地インドから本国イギリスへ、あるいはインドから帝国の各植民地へと延び、帝国外の地域にまで拡散していった。それによつて、世界の諸地域にあらたな関係が構築されていった。なかんずくドイツ人林学者によつて築かれたインド、イギリス、大陸ヨーロッパ（ドイツ・フランス）との三角関係は、非常に興味深い。それだけに、たとえばシュリッヒその他の森林管理官についても、ブランデイスと同様、詳細な説明がなされていれば、読者の興味もより一層深まるように思われ、その点がやや惜しまれた。植民地の環境保護主義が地球規模での環境保護主義へと発展していった背後には、英領インドを中心に帝国の内外にひろがっていた森林官・森林局・林学機関の国際的なネットワークの存在があつた。グローバルな環境保護主義の成立過程において帝国が与えたインパクトも、帝国を超えて張り巡らされていた人・情報・機関のネットワークの存在を抜きにしては考えられない。こうしたインドの森林管理官によつて形成された広範なネットワークは、イギリス帝国を超えて展開していたインド系商人のネットワーク（これに関しては、たとえば大石高志「インド系移民のネットワークとイギリス帝国―イギリス帝国の裏面史／裏面史としてのイギリス帝国―」、秋田 茂編著『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』、ミネルヴァ書房、二〇〇四年所収を参照）と一脈通ずるところがあるように思われ、その意味でも評者は興味をかきたてられ、啓発されるところ大であつた。

環境保護の根幹を成す乾燥化理論も評者の関心を惹いたもののひとつである。従来の研究では、植民地における林学の発展は、端的に言つて、帝国による森林資源の収奪という主文脈でとらえられてきた。だが、著者はこれまで十分に

明らかにされてこなかった乾燥化理論に注目することによって、植民地における環境保護主義の確立やグローバルな環境保護主義の成立にあらたな解明の光を投げかけている。この「乾燥化というパラダイムに特徴的なのは、土壌浸食や洪水、水源の枯渇といった災害を自然発生的なものではなく、森林破壊という人為的要因によるものとして捉えることであつた」(二八三頁)。言いかえれば、インドの森林管理官は自然災害を天災というよりは、むしろ人災と見做し、災害の防止策として森林保護を訴えていったのである。こうした乾燥化理論が「事実」なのか「神話」にすぎないのか判別は難しいともいわれるが、いずれにせよ自然災害は森林破壊に起因するとの見方は説得力をもち、国際会議の場でも共有されていくのである。

大戦前にインドをはじめ植民地で展開した林学は、大戦間期にイギリスを中心とする帝国林学に再編され、さらにヨーロッパ諸国主導の国際林学へと発展してゆく。グローバルな環境保護主義の確立には帝国が大きく関与していたのである。そこから浮かび上がってくるのは、帝国主義の特徴としてしばしば指摘される列強の対立や国家間の競争というよりは、むしろ協調である。本書がわれわれに教えてくれる帝国主義の「もうひとつの顔」は、こうした林学をめぐる帝国と国際協調主義との併存である。それはまさに本国に視点を据えた「イギリス」の帝国史というよりはむしろ、本書のタイトルが象徴しているように、イギリス「帝国」からみる環境史が照射している帝国主義の一面なのである。しかしながら、本書においては、グローバルな環境保護主義の支柱となった乾燥化理論が、各地域の森林政策にどのように適用され、いかなるインパクトをもたらしたのか、そしてまたそれはどの程度有効性を発揮し得たのかという問題については立ち入った検討がなされていない。この点、隔靴搔痒の感が禁じえないが、著者自身が他の著作のなかで述べているように(北原系子、寺田匡宏編『歴史・災害・人間、上巻〈災害史・原論〉』歴史民族博物館振興会、二〇〇三年、九八頁)、それはすぐれてローカルな問題であり、植民地の側のナショナル・ヒストリーとも関連づけて究明するべき問題で、環境史全体の大きな課題といえよう。

ところで、著者も指摘しているように、本国イギリスで本格的な森林政策が実施されるのは第一次世界大戦後のことであった。その象徴的なできごとが、一九一九年の森林法に基づく森林委員会の設置であり、同委員会の第一の目的は植林による木材の増産にあった。「こうした第一次世界大戦後のイギリスにおける森林政策の劇的な変化は、戦時中、戦争直後の木材不足に対する不安によって引き起こされたものであった」(一二二頁)ことは十分に頷けるところである。同時に、かかる変化は果たしてどの程度「劇的な」ものであったのか、という素朴な疑問も湧いてきた。きわめて興味深い問題だけに、そのあたりまで一步踏み込んで論及していただきたいと思ったと思うが、望蜀であろうか。

第一次世界大戦がイギリスの木材輸入に打撃を与え、深刻な木材不足を招来したことは紛れもない事実である。しかしながら、歴史をふりかえってみると、一八世紀のあいだにかなりの森林面積が失われ、すでに一九〇〇年頃にイギリスの森林被覆率は最低値(四%)に達していたという指摘もある(L.G.Simmons, *An Environmental History of Great Britain*, Edinburgh University Press, 2001, p.97)。一九〇七年六月二五日にはロンドンで植林会議(Afforestation Conference)が開催され、席上、シュリッヒは輸入木材の平均価格が一八九〇年から一九〇六年にかけて一七%上昇し、針葉樹のそれは三〇%上昇していたことを明らかにし、荒地における植林を提唱した。リーズ市の代表者は、同じ会議の場において、政府が植林の問題を真剣に考え、植林事業に着手する必要性を力説した。また、国の内外を問わず、木材の供給不足が深刻化している現状や、北米・スカンジナビア・カナダといった対イギリス木材輸出国における森林破壊がかなりすすんでいることが報告された。さらに、当時の不況を反映して、植林は失業対策事業の一環として俎上にのぼっていた。

要するに、第一次世界大戦の勃発を待たずして、国内における植林事業は焦眉の急となっていたのであり、第一次世界大戦はその決定的な「引き金^{トリガー}」となったという見方もできるように思われるが、いかがであろうか。

森林委員会が設置されたことによって、イギリスの林業・森林政策が地主層の個人的な問題から国家のそれへと転

換を遂げ、政府が直接国内の森林政策に関与するようになった意義は大きい。他方で、地主層の間にも従来のような成り行き任せの状態では森林経営もおぼつかないという認識が芽生えつつあった。第一次世界大戦後、イギリス国内では森林委員会の主導により、大規模な植林事業が展開されてゆくが、植林された樹種に着目してみると、その大半がトウヒをはじめとする北米産の針葉樹であった。それらは、一九世紀を通じておこなわれた植林の際に、地主貴族がみずからの大所領に植え込んでいた樹木と同種のものであった。標高の高い場所でも生育する北米産のトウヒや、比較的痩せた土地でもマツなどよりは生産性の高いダグラス・モミがブリテン島にも順応することは、大地主の領地でいわば「実験済み」だったのである。たしかに一八世紀の植林は領地の美観形成を目的として行なわれるケースが多かったが（この点は庭園史とも関連する）、一九世紀のそれは概して木材生産を目的としておこなわれ、「投資」の性格が強くなってくるとの印象を受ける。さらに、王家の所領においても植林はおこなわれており、一八二三年までにはすでに三万エーカー以上の造林地が形成されていた。政府は一〇万エーカーの土地を森に造り替えるべく、オークに不向きな土地には、主にスコットランド松（スコツ・パイン）を植え込んでいった。いずれにせよ、第一次世界大戦以前にすでに戦後の植林活動の下地ができており、政府主導による大規模な植林事業の必要性が二〇世紀はじめに強く認識されていた事実は看過できないであろう。

このようにみてくると、第一次世界大戦前後の植林活動における歴史的連続性や、戦後新規におこなわれた国家的事業としての森林政策の実態（森林委員会が供与した助成金の使途なども含め）を明らかにすることによって、第一次世界大戦後のイギリスにおける森林政策が、どの程度「劇的な」ものであったのかがより鮮明になり、説得力に富む議論が展開できるように思われた。もとより、これらのことについては誰よりも著者自身が知悉しているにちがいない、評者による愚見や誤解については、著者ならびに読者諸賢のご批判とご寛恕を乞う次第である。

巻末には帝国林学会議の代表リストが掲載されており、それじたい貴重な資料となっている。また、文献目録の取捨

選択もきちんとなされており、著者の真摯な研究姿勢がうかがえる。それがまた本書の質を高めている。なお、若干ではあるが、校正ミスと思われるものがあるので指摘させていただく。「保護官理」(六〇頁)は「保護管理」、「土壤深刻」(一一三頁)は「土壤浸食」であろう。また「にも関わらず」(一一七頁)は「にも拘わらず」、「鑑賞目的」(一九八頁、第三章、注二八)は「観賞目的」ではなからうか。些事で恐縮だが、増刷の折にでも訂正がなされることを期待する。

以上、浅学を承知で駄弁を弄してきたが、本書が環境史ならびにイギリス帝国史の分野において、新生面をきり拓いた先駆的業績であることはまちがいない。その論点は多岐にわたるが、従来の本国中心の一面的な帝国史像を修正し、単なる本国と植民地との相互影響の考察にとどまらず、イギリス帝国がグローバルな環境保護主義や林学制度の確立に関与した、そのありようを実証的に解明した本書の意義はきわめて大きい。環境史、帝国、インド、森林、乾燥化、環境保護、グローバリゼーションといったキーワードで研究をおこなうものにとつては必読の書となるにちがいない。

昨今、「美辞麗句の海」を漂い、自己宣伝ならぬ自己宣伝が逆に読者をディスカレッジしてしまうような出版物も目にするが、その一方で、本書のように地道な研鑽の賜物ともいえる学術書が刊行されたことは、慶賀の念に堪えない。馬齢を重ねてきた評者は、新進気鋭の研究者が物したこの意欲的な作品から多くのことを学ぶ機会を与えられた。著者の力量に心から敬意を表し、今後ますますの活躍を期待して、筆を擱くこととする。

*この書評を執筆するにあたっては、関連する著者自身の既発表論文(詳細は本書二二四頁を参看)を参照させていただいた。いずれも手堅い論考であり、環境史というあらたな歴史学の一支脈に裨益するところ大であることを附記しておきたい。なお、本稿で言及した第一次世界大戦前後のイギリスにおける植林をめぐる問題や森林被覆率、樹種などについては、さしあたり以下を参照。O.Rackham, *Trees and Woodland in the British Landscape*, London, 1976; N.D.G.James, *A History of English Forestry*, Oxford, 1981; J.White, *Forest and Woodland Trees in Britain*,

Oxford University Press, 1995; I.G.Simmons, *An Environmental History of Great Britain*, Edinburgh University Press, 2001; Anonymous, "Afforestation Conference in London", *Quarterly Journal of Forestry* (hereafter *QJF*), vol.I, 1907; Anonymous, "Afforestation", *QJF*, vol.III, 1909; M.C.Duchesne, "The English Forestry Association", *QJF*, vol.VII, 1913; R.L.Robinson, "Forest Policy", *QJF*, vol.XIV, 1920; Anonymous, "The Forestry Commission and Unemployment", *QJF*, vol.XVI, 1922; Anonymous, "Sir William Schlich's Work in Britain", *QJF*, vol.XX, 1926; Forestry Commission, "Forestry Grants", *QJF*, vol., XXI, 1927; A.C.Forbes, "Fifty Years of English Forestry", *QJF*, vol.XXVI, 1932.